

御伽草子の心話文

阿 部 八 郎
(日本語学)

話の中に登場する人物がどのように待遇されているかをみる方法の一つとして、地の文・会話文・心話文などに分けて、それら各文の中で使用されている待遇表現の異同をみるのも有効な方法と考えられる。特に、聞き手が存在しない心話文の中に使用される待遇表現は心話者の飾らない敬意が反映されたものとして、またそのような使い方をした作者の待遇表現意識にまで探ることが出来る。

筆者はこれまで数本の小論の中で心話文の特徴を探ってきたが(注1)、今回は御伽草子を対象に心話文の特徴を探ってみたい。

同一対象者に使用される心話文・会話文・地の文の組み合わせと待遇表現の関係は次の八型になる。(○は敬語表現がある文、×は敬語表現がない文)

- A・心話文○・会話文○・地の文○
- B・心話文○・会話文×・地の文○

- C・心話文○・会話文○・地の文×
- D・心話文○・会話文×・地の文×
- E・心話文×・会話文○・地の文○
- F・心話文×・会話文×・地の文○
- G・心話文×・会話文○・地の文×
- H・心話文×・会話文×・地の文×

今回調査対象にした御伽草子は、同一人物に対して同一の型のみが当てはまる例が少ない。これらのうち、用例が多くまた御伽草子の特徴が現れている型A・Eを中心にして心話文の特徴をみていくことにする。底本は岩波古典文学大系・御伽草子である。(用例後の数字は、ページ数・行数の順)

一 型A

この例は心話文・会話文・地の文すべてに敬語表現がみられる例であり、各文それぞれの待遇表現上の違いを見いだすことは出来ないが、その現れ方によって、2種に分けることが出来る。第1種目は敬語表現が状況の変化にとらわれることなく、絶対的な使用対象となる場合と、第2種目は無敬語表現の対象になる人物が環境・状況によって敬語表現の対象となる場合である。

第1種目の対象になるのはまず、宗教関係、特に神仏関係を挙げることが出来る。宗教に対する畏敬の念が待遇表現上にも現れていると言える。

ただし、これまで調査してきた中の今昔物語集・宇治拾遺物語は仏教関係が多かったが、御伽草子では神社関係も多くなっている。「神仏」と表現されている例が目立つ。

「文正さうし」の場合、心話文1-1-1①・会話文1-1-1②・地の文1-1-1③のほか、祈り1-1-1④にも敬語表現が使用され、神自らの自敬表現1-1-1⑤もあり、「横笛草子」では聞き手がいない独言1-1-1⑥にも敬語表現が取られている。

1-1-1① 文正「げにも」と思ひ、「大宮司殿も神仏にも申せとこそ仰

せられつれ」と思ひて 33.12

1-1-2 「さらば神仏へ参りて申かけべし」と申ける。 33.13

1-1-3 (鹿島の大明神は)かたじけなくも御宝殿の御戸を開き給ひ、

まことに気高き御声にて 33.16

1-1-4 (文正は鹿島の大明神に)「願はくは一人の子をたび給へ」

とぞ祈り申ける。 33.15

1-1-5 (大明神は文正に)「なんぢ申ところさがたきにより、七

日のうちに到らぬ所なく求むれども、なんぢが子になるべ

きものなし。さりながらこれをたぶ」とて 34.2-3

他に「酒吞」 380.2-3にも

1-1-6 横笛は涙を流し申やう、「…かなはぬ事をかなへさせ給ふこ

そ、神や仏の誓ひ也」と、泣くより他の事はなし。 354.15

「文正さうし」大宮(神職の長)は心話文1-1-2①、会話文1-1-2

②、地の文1-1-2③で敬語表現の対象になっている。

1-1-2① 文太思ひけるは「…わが命あらん限りは、(大宮司に)奉公

申べきと存じ候ひつるに、かゝる仰せくだる上は力なし、

…とて 30.1、他に 33.12

1-1-2② (文正が妻に)「大宮司殿一人の子をもたぬ事を、本意なく

おぼしめすなり。…」 33.10

1-1-2③ かの宮の神主に、大宮司と申す人おはしけるが、長者にて

ましましける。29. 5

これに準ずる対象が自然界の「光」である。地の文「木幡狐」1-3のみの例であるが、神仏に準ずる扱いと見てよいと思われる。

1-3 かくて日にそへて、光さし給ふ心地して、うつくしく生い立ち給ふ。154. 8

天皇を中心にした皇室関係にも敬語表現が使用されている。醍醐天皇・後白河法皇と具体的に明示される天皇・法皇1-4①を含め敬語表現で語られ、自敬表現1-4②もある。

ただし、「文正さうし」の場合、長者になった文正について誰が財宝を多く持っているかを人々が比較するとき、天皇に対し「君」以外に敬語表現が取られない例1-4③がある。しかし、この例以外は敬語表現が取られ、また会話文の中の心話文でも敬語表現1-4④が取られ、天皇に対しては高い敬意が現れている。

1-4① (猫が僧に)「延喜の御代(＝醍醐天皇)：後白河の法皇の御時：」「猫のさうし」302. 2

1-4② (天皇が頼光に)「いかに頼光うけ給はれ。：」「酒吞」363. 14

1-4③ (人々は文正が豊かになったので)「たからはいかなる十善(＝天皇)の君と申とも、これには過ぎじ」とぞおぼえける。32. 1

1-4④ (文正に)大宮司殿のたまひけるは、「文太はまことや限り

なき長者となり、『十善の君にましますとも、われにはいかでまさり給ふべき』とかたじけなくも申とかや。：」32. 13

政治的立場の人物では「鉢かづき」宰相(＝参議 心話文1-5①、「一寸法師」会話文1-6①・地の文1-6②、「梵天国」中納言心話文1-7①②・会話文1-7③・地の文1-7④(他に「文正」二位中将39. 14 46. 9)、「木幡狐」大納言の息子の三位の中將心話文1-8①・会話文1-8②・地の文1-8③が敬語表現の対象になっている。

「のせ猿」では兎の壱岐守の一人娘たまよの姫が敬語表現の対象になっている。1-9①は「こけまる」が姫の文を見てその文字の美しさに感動する場面であるが、心話文と解釈してみた。会話文1-9②では姫に直接話す場合に丁寧語で、1-9③第三者として話す場合、また地の文1-9④⑤にも敬語表現が取られている。

また、ここで、特に注目したいのは会話文1-6①で宰相に対して敬語表現をとっているのに対し、地の文では「一寸法師かくて人にも踏み殺されんとて」(32. 7)と平常語で待遇している点である。

この場面は一寸法師の心話文にも近い表現であり、心話文と会話文の違いが待遇表現に明瞭に現れているといえる。

1-5① 三位中将殿おぼしめしけるは、「此程宰相の君絶え入り思ひつることこそことほりなれ」とおぼしめしける。80. 4

- 1-6 ①（一寸法師が宰相に）「人な踏ませ給ひそ」と申 321. 13
- 1-6 ② 三条殿と申人のもとに立ち寄りて、「物申さん」といひければ、宰相殿はきこしめし…御覧ずれ共人もなし 321. 3
- 1-7 ①「もしや、中納言ふり来り給ふ」とて、女房たちはしりまはる。 279. 4
- 1-7 ②（姫は）「（中納言は）さては、いかやうにして、此所迄はおはしましけん」と思召して 282. 6
- 1-7 ③ ゆゝしき官人一人天くだり、侍従に向ひ、御涙を流して、「汝七日の間吹き給ふ笛、則梵天国へ通じ…」とて 267. 16
- 1-7 ④ 侍従は夢とも、現ともわきまへず、床よりおり給ひて、御経を誦誦し給ひて 268. 3
- 1-8 ①（御前は）「うつくしの中将殿や、われ人間と生れなば、かゝる人にこそ逢ひ馴るべきに…」と思ひけるが 150. 2 他に 156. 11、154. 10、155. 10、154. 10
- 1-8 ②（きしゆが乳母に）仰せけるは「…中将殿、さこそは歎かせ給はんずらん。…」とて、涙にむせび給ひけり。 156. 6
- 1-8 ③ 中将殿御覧じて、たぐひなき御事に思ひ給ふ。 154. 5 他 149. 7
- 1-9 ①（こけまるはたまよ姫の文を見て）「美しの御手や」と、胸にあて顔にあて 295. 14
- 1-9 ②（いなが姫に）「昔よりつれなき人は、あさましくなりはて候」 295. 3
- 1-9 ③（いなががこけ丸に）「…（北の方）姫の母が」いできさせおはします姫にてましませば、美しきことは断なり。御名をばたまよの姫と申さふらふ。…」 293. 14
- 1-9 ④ 美しき姫君、琴ひきて居給へり。 290. 11
- ⑤ 兎の沓岐守殿のひとり姫にてぞおはしける。 290. 15
- 以下の例は、待遇表現の使用法が一定でなく、第2種に相当する。基本的には心話文・会話文・地の文ともに敬語表現がとられるが、敵対者は会話文で無敬語表現をとる場合がある。
- 「唐糸さうし」頼朝の場合、地の文の他に頼朝の部下「もとすけ」の心話文 1-10 ①と唐糸の娘万寿の心話文 1-10 ②で敬語表現を使用しているが、敵対者が会話する場合は 1-10 ③無敬語表現になっている、待遇表現に変化を持たせている。
- 1-10 ①（頼朝の部下もとすけは心話文で）「…いかさまこれは、わが君様（「兵衛佐源頼朝」の御命を、ねらひ奉る女なり。君に此事を知らせ奉らん」とて 127. 4
- 1-10 ②（唐糸の娘である）万寿承り「（頼朝に対し）名のり申まじ」と思へども「此度名のり申さずは、叶はじ」とや思ひけん 145. 6

1-10③ (松が岡から土屋)「そもそも頼朝は、日本の主となるべき者が、礼儀法度を知らずで、日本の主になりがたし。」128.

12-129. 3

「小敦盛」に登場する敦盛に対して、地の文、会話文では敬語表現がとられているが、心話文では敬語表現 1-11①②と無敬語表現 1-11③④の両方が使用されている。また、敦盛を殺した熊谷が心話文で敬語表現 1-11⑤を使用している。全体的に高い敬語表現の対象になつてはいるが、待遇表現の使用法は不徹底になつているといえる。

1-11① (北の方は) よくよく物を案じ給ふに、「…敦盛の御あとを弔はゞや」とおぼしめし、…「…敦盛にあひ奉らん事及びなし」と 239. 12-14

1-11② (子は)「さては我父にてましますか」とてなのめならず喜びて 237. 3

1-11③ (北の方は)「…またうき人の後世をも、誰が弔ふべし」と思召、 239. 8

1-11④ (子は)「こはいかなるぞ不思議や、父の膝を枕として臥したる」と思ひしが、…「さてはわが父の骨にて有よ」とおぼしめして、…「…三途の川の御供申べし」とて 238. 2-7

1-11⑤ (熊谷は)「…一の谷の合戦に討たれさせ給ふ、敦盛に、此児少しも違ひ給はぬ不思議さよ」とて 230. 14

生まれたばかりの小敦盛(敦盛の子)の処置に親が思い悩む場面では、心話文で無敬語表現 1-12①・敬語表現②両用、捨て子になつた小敦盛の正体を知らない法然上人は「たゞ人にては有べからず」と「人」という表現で敬語 1-12③、敦盛を殺した熊谷入道も敬語表現 1-12④を取っている。

一方、同じ小敦盛に対し、地の文 1-12⑤で敬語表現をとっているが、心話文・会話文で使用する人物(また神)によつて敬語表現の有無がみられる。

会話文では大明神が小敦盛に暗示する場面 1-12⑥は無敬語表現である。この例は神から人間への会話であり、無敬語表現も納得できるのであるが、一方では父が同じ心話文の中で息子に対して無敬語表現・敬語表現 1-12⑦をとっている場合がある。

敦盛親子に対する待遇表現はおおむね敬語表現をとっているが、無敬語表現もありその使用法は不徹底である。これまでに使用されていた人物とは敬意が低くなつているといえる。なお、敦盛北の方は、形式 E (心話文×・会話文○・地の文○) に分類できる。

1-12① (母親は)「(小敦盛を)いかなる所にも、預け置き、かたみに見ばや」 229. 11

1-12② (母親は)「(小敦盛は)よみがへりし給ふか」と 234. 6

1-12③ (法然上人は)「不思議や刀を添へ、衣に巻きて捨てけるや

うは、たゞ人にては有べからず…」と喜びて 230・7

1-12④（熊谷入道の心話文）「一の谷の合戦に討たれさせ給ふ敦盛に、少しも違ひ給はぬ不思議さよ」 230・16

1-12⑤いつくしき若君にてまします也 229・10

1-12⑥（賀茂大明神が小敦盛に）「あはれや汝、いまだ見ぬ父をかほどに思ひけるか。これより末、津の国昆陽野生田と尋ねよ」 234・15

1-12⑦（父敦盛が息子に）「我ことをかほどに思ひ給ふべからず。

…わがことをかほどに思ふべからず」 237・4-6

「横笛草子」に登場する瀧口時頼に対しては、基本的に敬語表現が取られている。しかし、心話文・会話文では待遇表現に変化が認められる。恋人横笛の瀧口に対する待遇表現を見てみる。

1-13①は瀧口が横笛との結婚を父に禁じられて、瀧口と横笛が逢えない状況での横笛の心話文であるが、瀧口に対して敬語表現がとられている。しかし、行方をくらました瀧口をようやく捜し当てても会ってくれない状況では無敬語表現 1-13②になっている。横笛の恨みが出ていると見ることが出来る。

また、乳母の心話文であるが瀧口を対象にして無敬語表現 1-13③である。この作品はかなり簡単に心話文でも敬語表現がとられているので、このような主従関係から見れば、無敬語表現は異例ともい

える。

1-13①（横笛は）「…（瀧口は）いつしかすみ給ふらん、うらめしや」とて思ひ沈みし所に 352・4 他に 353・3、356・4-14

など敬語表現の用例多い

1-13②（横笛は）うらめしげに見て、「さても瀧口情なく、自らを何になれとて、か程に捨てはてけるぞ」と、「うたてや」と思へば、いとゞ後へひく心地して「…鮑の貝片思ひ、人はかほどにつれなきを…」 357・15

1-13③（乳母は）「殿の恋けるも、断」とこそ思ひけれ 350・3

瀧口の相手方横笛に対する心話文・会話文とともに敬語表現が取られる場合と取られない場合がある。心話文では横笛の死後の前後で使用に変化があり、生前は無敬語表現 1-14①、死後は敬語表現 1-14②が取られ、後者は瀧口の哀悼の気持ちが見れていると見ることが出来る。

1-14①（瀧口は）「いたはしや横笛が、われが思ひ立つ事を、露程も知ならば、いかに悲しむべき物」と、横笛が心のうち、思ひそめつる始より 351・10 他に 355・15、356・15、358・12

1-14②（瀧口は）「…（横笛は）『うらめし』とおぼすらん。…かやうにならせ給ふも、…」 359・12 他に 359・16

「物くさ太郎」に登場する女房（＝侍従の局）に対して太郎が心

話文で敬語表現1-15①と無敬語表現1-15②の二つを取っている。
会話文でも敬語表現1-15③を取り、地の文での単独での行動には「女房一人出来たり」(194.14)と無敬語表現だが、複数の関係の中での待遇表現は敬語表現1-15④になっている。

1-15①(太郎は)「…(女房が私に)梨をた^びたるは、われは男もなしといふ心、…」と思ひて 201.14

1-15②(太郎は)「ここにこそわが北の方は出来ぬれ、あつぱれとく近づけかし、い^だきつかん口をもすは^ざや」と思ひて 195.

11

1-15③(太郎が女房に)「いかにや女房、わ^ごぜ故に心をつくし、骨をば折るぞ」とて 199.14

1-15④女房、是を御覧じて 195.14、さらに御返事ものたまはず 196.

3 他に196.5

「唐糸さうし」に登場する唐糸の前(木曾侍手塚の娘)に対して、その娘万寿は心話文する場合1-16①、会話文でも敬語表現を取っている。しかし、敵の場合は唐糸の前を第三者として話す場合に敬語表現1-16②もとられるが、直接会話文する場合にも無敬語表現1-16③がとられて、不安定であり、地の文でも敬語表現・無敬語表現両用である。唐糸の場合、心話文で娘が敬語表現を取っているのは、親子関係の中で使用されているものと理解される。

1-16①万寿は「こよひ母の御行方を、尋ねて見ん」とて 137.10

1-16②(供の女房がもとすけに)「唐糸様の御小袖なり」と申。 126.

16

1-16③(頼朝が唐糸に)「何とて汝は、木曾が重代に、ちやくいと申脇指をばさしたらん」 128.2

次に、一般庶民が登場人物となると、身分的な状況に応じて待遇表現が変化する場合があるので、それらの例をみてみる。

「物くさ太郎」の太郎の場合、出世前後で待遇表現が変化している。

心話文の場合、ものぐさに暮らしているときは、宿の亭主1-17①、情けある人1-17②が無敬語表現で心話文している。ところが、出世後の結婚後は心話文1-17③は「田舎の者」という「者」を使用しながら、一方では「申」を使用している。

会話文は、出世前は第三者として対象になるときは卑語1-17④を含む無敬語表現1-17⑤だが、第二人称1-17⑥、また後半部分1-17⑦⑧になると一貫して敬語表現の対象になり、天皇も敬語表現1-17⑨で待遇している。他に会話文では「…わたの」(191.10)などの親愛語が使用されている。また、地の文では出世後に敬語表現1-17⑩がとられている。

1-17①(宿の亭主は)「扱も扱も是程のたくらだは、なし」と思ひ

て 193・16

1-17 ②（情けある人が太郎に）「いかにひだるかるらん」とて（餅を）得させれば 118・3

1-17 ③（女房は）「此者はいかさまにも、田舎の者にて有けるを：申てせさすることよ」 196・9

1-17 ④「きやつめがことか、聞ゆるものくさ太郎といふものか」 189・15

1-17 ⑤ある人申やう、「いざ此物くさ太郎を、したてゝ上せん」といひければ 190・16

1-17 ⑥「いかに物くさ太郎殿、われらが大事の御公事にあたりて候を助けてたべ。」 191・4

1-17 ⑦豊前守是を見て、「男美男にておはしける、名字はたれ」と問ひ給へば 204・3

1-17 ⑧（物くさ太郎という名に對して）「ことのほか成御名かな」とて 204・3

1-17 ⑨（天皇は太郎を）「皇子をはなれて、程近き人にておはしけるよ」とて 205・16

1-17 ⑩（太郎は豊前守に）ひきつくろひて参られたり。…うたの左衛門になし奉る。 204・5

以上、心話文・会話文・地の文ともに敬語表現が取られる例を見

てきた。御伽草子の場合、特に筋の展開に応じて登場人物に対する待遇表現が変化していると言える。しかし、絶対的な立場で待遇表現に影響が少ない対象もある。これを第1種とし、影響を受けて変化しやすい対象を第2種として分けてみた。

第1種には、宗教関係・皇室関係・政治的上位者が入る。神仏、神職者の長、天皇、宰相（＝参議）、中納言、大納言の息子の三位の中將、国守の娘などが相当する。

第2種には、源頼朝・敦盛親子などの武士関係から、壹岐守の一人娘、ものぐさ太郎という庶民まで多様である。

次にこの項目の第1種に準ずる例として、心話文には登場しないが、会話文・地の文ともに敬語表現があり、心話文にも敬語表現が取られると思われる対象を挙げてみる。

「横笛」の建禮門院（清盛娘徳子）・女院は、会話文1-18 ①・地の文1-18 ②③ともに敬語表現が取られている。「酒吞」では「池田くにたか中納言」に對して、地の文、会話文にも敬語表現がとられていて、自敬表現1-19 ①②も使用されている。

1-18 ①（瀧口は乳母に）「いっそや女院の御所へ御使に参候ひし時、横笛とやらんを、一目見しより…」と懇に語りければ 347・

13 1-18 ② 建禮門院の御時 346・1、

1-18③ 女院をはじめまいらせ、聞く人聞く人も袖をしぼらぬ者はなし。 360. 8

1-19① (中納言が左近に)「いかに左近うけ給はれ、…つれて参れ」と仰ける。 362. 1-2

1-19② (中納言が占い師に)「いかにまさとき承れ。…」 362. 4

「のせ猿さうし」に登場する「こけまる」、ゐなか狐、たまよ姫の両親(壱岐守)は会話文・地の文に敬語表現がとられているが心話文の例がない。心話文で敬語表現が取られるか疑問である。

以下の例は、心話文・地の文ともに敬語表現が取られているが、会話文の例が無い人物である。これまでの例から見て、会話文でも敬語表現が取られる可能性の高い人物について考えてみる。

「一寸法師」の宰相の妻(姫の義母)に対して宰相の心話文・地の文1-20①、「文正さうし」の父母(閑白)に対して息子(中将)の心話文・地の文1-21①、「木幡狐」の子に対して中将の心話文1-21②と地の文1-21③、「梵天国」の両親(右大臣)に対して若君の心話文1-22①と地の文1-22②ともに敬語表現をとっている。これらは夫婦関係で夫が妻に、親子関係で親が子に、子が親に心話文で敬語表現を取っているとも言える。

1-20① (宰相は)「(妻は)あはれ此こと(＝娘が家を出ていくこと)をとゞめ給ひかし」とおぼしけれども、継母のことなれば、

さしてとゞめ給はず。 323. 6-7

1-21① 中将殿：「今一度父母たちにも見え奉らん」とおぼしめし、御前に参り給へば、(父母は)喜びあひ給へば、中将殿は「遠国へ下らん事もしろしめず、あとにて歎き給はんことよ」

とき御涙ぐみ給へば 42. 3-42. 6

1-21② (中将は)「…若君さへ生い立ち給へば、何のうらみにか出で給ふぞ」と、御歎き限りなし。 159. 9

1-21③ (中将の子は)かくて日にそへて、光さし給ふ心地して、うつくしく生い立ち給ふ。 154. 8

1-22① (侍従は)「父母の御菩提のため」と回向し給ふ。 268. 3

1-22② 夫婦諸共に清水に参り…種々の願を立て給ひける。 265. 8

「猿源氏草紙」鰯売りの猿源氏が宇都宮彈正に化けた状況で使用される待遇表現は変化に富む。遊女螢火が宇都宮に不審を抱くときは心話文1-23①・地の文1-23②ともに無敬語表現だが、表面だつての会話文1-23③では敬語表現を使用している(形式G)。しかし、信用するようになってからは心話文1-23④・地の文1-23⑤に敬語表現が使用される。会話文の場面がないが、あれば敬語表現が使用されるものと思われる。

1-23① 螢火心に思ふやう、「あら不思議や宇都宮は、大名とこそ聞しに違ひ、家の子又は同名などもなくして、たゞ一人座敷

に出で、よろづいやしきありさまにて、内の者どもは声高にし…」 179. 15

1-23 ② かのにせ宇都宮、馬よりゆらりと下りて…とて、馬引き寄せて乗らんとせし処に 177. 2

1-23 ③ 螢火聞きて「何事をのたまふぞや。御身は鰯売りにてましますぞや。」 180. 12

1-23 ④ 螢火其時思ふやう「…げにや宇都宮、はじめて上洛し給ひつれば、…」 185. 12

1-23 ⑤ さても宇都宮、その後は、鰯売の名をあらはし給へども 186. 3

次の例は、心話文で敬語表現が取られる例である。

天女「梵天国」 1-24 ①、関白「木幡狐」 1-24 ②、中將家の女房

衆「鉢かづき」 1-24 ③、主人「唐糸」 1-24 ④、両親「文正」 1-24

⑤「鉢」 1-24 ⑥、娘婿「木幡狐」 1-24 ⑦、歴史上の人物業平「小

町草紙」 1-24 ⑧猿丸太夫「猿源氏」 1-24 ⑨、不特定の人物「のせ

猿」 1-24 ⑩を対象にしてあり、御伽草子の心話文が身分的上下に関

係なく敬語表現が使用されている一端を示すものとなっている。

1-24 ①（若君は）「さては（天女が）参れと御教へ有」と思召て 275.

13

1-24 ②（きしゆ御前は）「…いかならん殿上人か、関白殿下などの

北の方ともいはれなん…」と思ひ 148. 9

1-24 ③（風呂の役人は）「…これに疾くから住ませ給ふ御女房衆も究てこれには劣りなり…」 71. 9

1-24 ④（唐糸＝木曾義仲左馬の守の侍の娘は）「…木曾殿の御滅亡は、親一門の滅亡なり、いかにもして此事を木曾殿へ聞かせ奉らん」 124. 16

1-24 ⑤（中將の息子は）「今一度父母たちにも見え奉らん」とおぼしめし 42. 3

1-24 ⑥（宰相は）「今一度父母を見奉りていづくとも知らず、出むことこそ悲しけれ」と、おぼしめせども、「ついに一度は離れ参らせんものを」と思ひ切り給ふ。 75. 7-9 63. 1、

77. 1

1-24 ⑦（狐両親は）「いかなる御方さまをも婿にとり、心やすきさまを見ばや」と思ひて 149. 3

1-24 ⑧「是は業平にてはましますや、観音菩薩」と思なり。 94.

14

1-24 ⑨（こけまるは）「…（猿の祖先である猿丸太夫が）よみ給ひし歌は…」とおぼしめし 289. 11

1-24 ⑩（こけまるは）「世の中の人たち、『身の程知らぬ望』と思ひ給はんやからもあるべし…」とおぼしめし 289. 8

以上、心話文・会話文・地の文ともに敬語表現がとられる様子を見てきた。その使用対象は絶対的な使われ方をする神仏・皇室・政治家からはじまり、次第に庶民まで下がつてきている。

このように、本来使用されにくかった身分的に低い登場人物にまで敬語表現が使用される原因は、御伽草子という語りの特徴に原因があるのではないかと考えられる。

心話文は心の中で思ったことを表現することであり、実際の音声言語では表現されない。心話文には基本的には聞き手が存在しないし、心話者は聞き手を想定しない。これまでの小論でみてたことは、この音声化されない、また聞き手不在という特徴のために、心話者はかなり自由な待遇表現が出来た。そのため、心話文での敬語表現は少なく、また使用対象も限定されていた（たとえば神仏・天皇・為政者など尊敬の対象者）。しかし、この御伽草子において心話文の中にも相当数の敬語表現が使用されていることは、語り手は心話文の内容を具体的に知る対象、すなわち聞き手（聴衆）を意識したからではないかと考えられる。「語り手」は、話を聴衆に聞かせる役割を果たす立場にある。御伽草子が音声を持って語られるとき、心話文も音声をもって語られる。語り手は、聞き手（聴衆）を意識することによって、心話文にも、「会話文」と同じような役割（音声言語・聞き手がいる↓待遇表現に気を使う↓敬語表現の使用）を感じ取り、

時に応じて会話文と同じような使用法をとったものと思われる。

以上が、心話文に敬語表現が多く使用されている原因と考えたい。この推論をに補強する材料がある。地の文や心話文の中に、丁寧語表現が時折使用されていることである。これは、語り手が聞き手（聴衆）を意識したために、聞き手に対して敬語表現を取ったためと考えられる。

「一寸法師」は地の文で「侍り」を使用し、「文正」は心話文の中「候」「申」を使用したのは、語り手が聞き手（聴衆）を意識した結果といえる。

「一寸法師」津の国難波の里に、おうちとうばと侍り。319. 2

「文正」文太思ひけるは、「…わが命あらん限りは、奉公申べきと存じ候ひつるに…」（今は一旦奉公を止めて、後日改めて）またやがてこそ参り申べし」30. 2

二 型E

会話文・地の文ともに敬語表現が取られる対象は、一見、身分的に高い人物と想像できるが、心話文に無敬語表現を取られると、その対象は以下のように高くない。

僧・発心者「猫のさうし」、遁世者「猿源氏」、姫・継母・三人の

兄嫁「鉢かづき」、亀・女房「浦嶋太郎」、出世する前の文正「文正さうし」、敦盛北の方「小敦盛」、義経・蝦夷の天女（大王の娘）姫君（実は江ノ島の弁財天¹²²・3）「御曹子」などが対象になっている。

「小敦盛」敦盛北の方の場合、捨て子となっている敦盛の子を拾った上人の心話文2-1①ではその生みの母に対して「人」以外は無敬語表現だが、会話文2-1②・地の文2-1③はともに敬語表現をとっている。

2-1①（捨て子を拾った上人は）「必ず其（＝説法を聞く人々）中に、此児の母とおぼしき人有べし」とおぼしめして²³²・7

2-1② 熊谷入道申やう「…年の齡二十ばかりの上臈の、容顔美麗に御わたり候が、十二ひとへに出立たる御方の…」²³²・3

2-1③ いつくしき女房の参り給ひて、此小人を見参らせ給ひて²³³・8

「文正さうし」文正に対して、対応する人物によって待遇表現が違っている。

最初の主人は心話文2-2①・会話文2-2②とも無敬語表現（地の文も無敬語表現）をとり（すべて無敬語表現の型Hに当たる）、文正の出世後も敬語表現をとらない。

文正の出世のきっかけを作る塩屋の主人は文正に話すとき地の文2-2③で「申」で表し、続く会話文では敬語表現をとっているが、

心話文2-2④では無敬語表現である（型E）。しかし、出世すると商人の会話文2-2⑤・地の文2-2⑥ともに敬語表現になる。出世後の心話文の例はないが、文正は最後に大納言まで出世しているので敬語表現がとられる可能性が強い人物といえる。

2-2①（主人大宮司は）「（文正の）心をみん」と思はれけん…²⁹・10

他³²・5、³²・10、³⁰・15

2-2②（大宮司が文正に）「なんちとしごろの者といへども、わが心に違ふなり。いかならん所へも行きて過ぐべし。…」²⁹・11

他に³³・3

2-2③ 主（＝塩屋が、文正に）申けるは「かくてつれづれにおはせんより、塩焼く薪なりとも取り給へ」³⁰・10

2-2④（塩屋が文正の働きぶりについて）「又なき者」と思ひける。³⁰・15

30・15

2-2⑤（商人が文正に）「宿は候はず。是へすぐに参りて候」と申給へば⁴⁶・15 他に女房たちの会話文³⁴・11に敬語表現

2-2⑥（文正は）やがて徳人となり給ふ。³¹・9

「猿源氏」に登場する元武士で鯛売りで大成した海老名六郎左衛門が、遁世者南阿弥陀仏と名乗るようになってから、会話文2-3①・地の文2-3②で敬語表現が使用されているが、心話文2-3③では「人」以外は無敬語表現である。

2-3① (猿源氏) 申やう「かやうの申事、間柄にこそ候へ、はづかしき申事にて侍れども…」 166 12

2-3② 南阿弥陀仏此由聞き給ひて、かれが宿へ行き、有様見給ひて 166 4

2-3③ 猿源氏思ふやう、「此人と申すは、才覚世にこえたりし人なれば、此事を語りなば、いかなる料簡もありやせん」と思

ひ 166 10-12

その他について略述する。

「鉢かづき」の場合。姫を対象にして、心話文の場合宰相(71. 2)、奉行(71. 9)、会話文の場合母(59. 1-4)、父(60. 2、62. 5-7)、宰相の父である中将(64. 7-65)、めのと(74. 12)が無敬語表現で待遇している。しかし、会話文の場合、姫に直接話すときは、宰相(69. 3、77. 3)、3人の兄嫁(80. 11)は敬語表現である。地の文では、「鉢かづき」になる前は敬語表現、後で無敬語表現がとられ、鉢が取れるとまた敬語表現がとられている。状況による待遇表現の変化を見ることが出来る(59. 5、8、9ほか)。

また、継母を対象にして心話文(82. 11)では無敬語表現だが、会話文・地の文(61. 3)では敬語表現を使用している。鉢かづきの3人の兄嫁も同様に心話文無敬語表現(80. 5)、会話文・地の文(77. 7-78. 6)敬語表現が取られている。この継母は身分的に高い点か

ら、会話文・地の文ともに敬語表現が取られているが、人間的な点から無敬語表現となったものと考えられる。

「御曹子」の場合。義経を対象にして、地の文・会話文(102. 105から7、105. 16、117. 13、119. 5)は敬語表現が多いが、心話文(117. 7)では無敬語表現をとっている。

大王の娘である蝦夷の天女、実は江ノ島の弁財天については地の文(116. 8、121. 9)では無敬語表現であるが、会話文で話し手が姫の父(大王)・聞き手義経という関係(117. 8)では敬語表現、話し手義経・聞き手姫本人の場合(117. 12)は敬語表現を使用している。

「猫のさうし」の場合、僧・発心者を対象にして会話文(298. 15、299. 14、300. 12、301. 7)、地の文(298. 7、298. 14-299. 5、301. 7、299. 13、306. 7)ともに敬語表現であるが、心話文(306. 6)は無敬語表現である。

「一寸法師」のおうぢ・うばに対しても会話文(320. 10)・地の文(320. 10、320. 7、325. 9)ともに敬語表現だが、心話文(320. 4)では無敬語表現である。

また、姫の場合は、一寸法師が心話文で対象にする場合は無敬語表現(322. 2)で、会話文(322. 6)・地の文(322. 1)は基本的には敬語表現を取っている。

「浦嶋太郎」の亀Ⅱ女房のばあいは、会話文(338. 5-8)・地の

文（338. 5、340. 3、341. 6 341. 11～16）はおおむね敬語表現がとられ、心話文（344. 7）は敬語表現である。

以上、会話文・地の文ともに敬語表現、心話文に無敬語表現の場合、使用される対象は、いまみたように対象全てが高いとは言えない。

しかし、会話文で敬語表現を使いながら一方の心話文で無敬語表現というのは、待遇表現の対象に対して自由な使い方が出来るという心話文の特徴が生かされていると見ることが出来る。

この小論では、型A・Eをとおして、特に心話文の特徴を探ってきた。御伽草子という「語り物」の特徴である、語り手と聞き手（聴衆）の関係の中で使用される心話文は、物語の中で聞き手が居ない場合も、実際は音声言語として表現されるために、心話者に対して敬語表現をとらせることが多くみられるという現象を見ることが出来た。

注

1 「心話文の中の待遇表現―今昔物語集天竺震旦部の場合―」（山形県立米沢女子短期大学紀要 第15号 1980年）、「心話文の中の待遇表現(2)―今昔物語集本朝仏法部の場合―」（山形県立米沢女子短期大学 米沢国語国文学部）

第8号 1981年、「心話文待遇表現の特徴―今昔物語集本朝世俗部の場合―」（國學院雑誌 第83号9号 1982年）、「作者の姿勢―竹取物語の場合―」（山形大学紀要人文科学 第10巻3号 1984年）、「近松世話浄瑠璃の心話文―好色一代男・好色五人女の場合―」（近代語研究 第8集 1999年）、「宇治拾遺物語の心話文」（山形大学紀要人文科学 第14巻2号 1999年）

Shiwa-bun in Otogizōshi

Hachiroo Abe

This paper examines the nature of honorifics by comparing the verbally expressed sentences with the so-called *shinwa-bun*, or mentally expressed but not verbally articulated sentences. The data are taken from *Otogizōshi*. In general, honorific expressions tend to be used in conversations just because of the presence of the listener, and *shinwa-bun* does not have this tendency because of the absence of him. In *Otogizōshi*, however, there are many honorific expressions even in *shinwa-bun*. This seems to be the result of the act of storytelling, where the teller was always aware of the listener's presence.